

研究資料

子ども理解へのナラティブ・アプローチ
J. コルチャック 『孤島の王様マチウシ』 にみる子ども理解

柴田 千賀子

Chikako Shibata: Narrative Approach to Understanding Children : Understanding Children learned from “King Matt on a Desert Island” by J. Korczak: Bulletin of Sendai University, 48 (2) : 77-89, March, 2017.

Abstract: In this manuscript, I will try to offer a narrative approach to understanding children by analyzing Janusz Korczak(1878-1942)’s children’s book “King Matt on a Desert Island” (1924). When we discuss understanding children, we often emphasize what should be done for them now, such as digging up previous reports in history or having retrospective childcare conferences. In this way, the focus ends up being placed upon the relationship between parents’ behavioral change and the children’s reaction. On the contrary, I would rather take the theoretical difficulties of understanding childhood into consideration, and focus on treating them as individuals. In Korczak’s story, he implies that children’s rights are the key to developing a deeper understanding of children, and concludes by suggesting that our process of trying to understand children needs to be redefined.

“King Matt on a Desert Island” has not been translated into English or Japanese. Therefore, I used the French version of this book in my analysis. The French title is “Le roi Mathias sur une Ile Deserte” . While it is not easy for us, Japanese to read this book, I was able to learn Korczak’s strong message – it is essential for us to think more seriously about our relationship with children and how we treat them. I tried to enhance our understanding of this principle by analyzing “King Matt on a Desert Island” which is made up with 35 chapters.

Key words: Understanding childhood, narrative approach, responsive relationship, sympathetic relationship
キーワード: 子ども理解, ナラティブ・アプローチ, 応答的・共感的な関係性

I. はじめに

保育者の専門性を培う保育者養成課程において、子どもを理解するための科目は、科目群を問わずに多い。では一体、子どもを理解するとはどういうことなのだろうか。子どもの発達過程や保育実践を通じた研究から、子ども理解の理論と実践についての見解は数多語られている¹⁾。しかし、保育実践の場で保育者は、計画に

書き尽くせぬ保育の展開に伴って子ども理解の複雑さを痛感する。その複雑さは、例えるならブリコラージュ的とも言えようか。ブリコラージュは、文化人類学者のレヴィ＝ストロース²⁾の言葉であり、「断片を合わせて繕う」という意味である。現代の画一的にものを大量につくる生産方法に対し、昔ながらに多種多様の仕事ができる職人を、彼はブリコール (= 器用人) と呼んだ。ブリコールはエンジニアと

は異なり、材料や器具がなくては仕事ができないわけではない。その時々に限られた道具と材料、すなわちその場にある「もちあわせ」³⁾で対処するのがブリコロールである。計画どおりにいくとは限らない、多様な営みである保育実践はまさにブリコラージュであり、保育者はブリコロールといえよう。レヴィ＝ストロースによれば、「もちあわせ」とは「いろいろな機会にストックが更新され増加し、また前にものを作ったり壊したりしたときの残りもので維持されている」⁴⁾という。例えば、完成形が見えているパズルと、完成形の見えないブリコラージュを比較したとき、前者には予め決められた数のピースが存在するため終わりの形が決定されるが、後者は「もちあわせ」の数と質を高めることによって形や大きさを無限に展開することができるのである。保育実践でいうなれば、保育者がどのような「もちあわせ」をもつかによって保育実践が大きく変わってくるといえる。そして、この「もちあわせ」が、「いろいろな機会にストックが更新され増加」するものであるならば、子どもをどのように理解するかによって各々の「もちあわせ」も変わってくるということがいえるだろう。

当然ながら、各保育者の子ども理解のプロセスは多様であるから、子どもを理解するという認識を共通のものにし、絶対的な定義を示すことは非常に困難である。しかしながら、保育者の子ども理解は、その保育者の内部に存在するものとして各々がもっていればよいということではない。なぜなら、保育者がもつ子ども理解が保育を形づくるのであれば、子ども理解の在り方によって保育の質そのものが左右されるからである。保育という営みを考えるとき、保育者の子ども理解のプロセスを考察していくことは外せない課題である。

別稿(柴田2015)⁵⁾にて、保育実践における多様な子どもの特性の発見や新たな子ども観への転換を生み出す有効な手立てとして、ナラティブなアプローチが有効であることが明らかになった。ここでいうナラティブ・アプローチとは、当事者が苦境から脱却するための社会構成主義にもとづくセラピーとしての臨床領域の

ナラティブ・アプローチとは一線を画すものである。例えば、物語ることから、目の前の子どもの背景を推察する、物語に重ねあわせることで子どもの行動の裏に隠された心情を読み取るような試みである。この試みは、大人が子どもの行為の背景に見え隠れする複雑な思いを自分のものとして捉えることにつながり、従来の子ども観の枠組みや規範を打破し、必然的に子ども観の刷新を迫られるものであった。本稿では、このナラティブなアプローチがもたらす効果に注目し、果たしてその効果が子ども理解の深まりにも寄与できるものであるか検討していきたい。

本論で着目するナラティブ・アプローチの中心を成すものは、ヤヌシュ・コルチャックの著書『孤島の王様マチウシ』の物語である。個々の保育者の語りを保育者一般の言説に抽象化することは非常に困難である。それゆえ、既存の物語が示す子ども理解の複雑さを道標としてみることで保育者の子ども理解を深めることができたら、保育実践の質の高まりに大きく寄与するということができよう。コルチャックが物語る『孤島の王様マチウシ』は、後述する通り、子どもの心情や子どもと大人の関係性を描く物語にしては特異な存在である。それは、計画に書き尽くせぬ多様な保育実践と共通の性格をもつとも考えられる。そこで本論では、未だ英訳・邦訳がなされていない『孤島の王様マチウシ』の翻訳を試み、物語の性質および子ども理解に寄与する可能性を明らかにする。

II. 教育者としてのコルチャックと『孤島の王様マチウシ』

1. コルチャックの子ども観

ヤヌシュ・コルチャック(本名ヘンリク・ゴールドシュミット 1878-1942)は、「人間としての子どもを探求し、子どもの権利の尊重を求めた」⁶⁾教育者である。子どもが人間であるということは疑いようもない事実であるが、子どもを取り巻く環境の中で一体どれだけの人が、「人間としての子ども」ということを理解しているのだろうか。コルチャックは、子

もを理解するために、観察するということを重要視した。彼は、「人間を認識すること、すなわち、まずは子どもを千通りの方法で研究することだ。別の方法があるだろうか？私の方法はそれに劣るだろうか。いややはり私はこれでやる。学問的にではなく家庭でやるやり方でやる。観察するのだ、肉眼で。」⁷⁾と述べている。コルチャックはこの決意表明ともとれる言葉を1927年出版の『感性』という著書に残している。この期間、彼は孤児院にて子ども達と生活を共にしている。したがって、観察を重視して子どもを理解するという姿勢は、子どもと共に生活する中で育まれていったということが見えてくる。彼の観察の方法の特徴として、塚本は「そこにあるのは、『子どもからの世界』」⁸⁾であるといい、コルチャックが観察から得た乳児の知性や感性に関する考察を紹介している。例えばコルチャックは、乳児がガラガラを手にして眺めたり、ガラガラを放り出して今度は服に縫い付けられているボタンをつかむ様子を観察した結果、乳児は手に感じる反動の原因を研究しているといい、乳児の理解しようとする努力を見よ、と訴える。そして、見逃そうものなら重大なことになると忠告するのである。このように徹底的に観察することから、子どもの何気ない言動も本人にとってみれば至極真剣な営みであるということを見出していったことが、「人間としての子ども」というコルチャックの子ども観を生み出したのである。大人にとって些細に見えることを、子どもにとって重要なこととしてみるができるかどうかは、日々子どもたちと生活する中での対話や観察の重なり産物であるともいえる。

ところで、コルチャックは子どもの中の人間を探求する中で、子どもと大人との差異を明確に意識していた。これは一見、子どもの中に人間を見る、ということと矛盾するかに思えるが、子どもと大人の価値の等しさと性質の違いは、彼の理論としての子ども観と目の前の子どもの姿の差異にぶつかりながら気づかされていったものである。それは、子どもと大人の違いについてコルチャックが述べている次のような言葉からうかがい知ることができる。「感性の分野

ではその力において我々にまさっている、なぜならそれを阻止するものが作り上げられていないからである。知性の分野では、少なくとも我々と同等である。不足しているのは経験だけである。だからこそ、大人がしばしば子どもになるし、逆に子どもが大人になる。」⁹⁾このように、コルチャックは子どもと大人との差異を認めながらも、子どもを応答的、共感的な関係が成り立つ存在として理解を深め続けていった。

2. 『孤島の王様マチウシ』の性質

『孤島の王様マチウシ』は、全35章で構成されている。その前編として、『マッド王』¹⁰⁾が位置づけられている。『マッド王』はコルチャックが1923年に出した物語で、邦題『マチウシ一世王』(2000)¹¹⁾、『子どものための美しい国』(1988)¹²⁾、『王さまマチウシ一世』(1992)¹³⁾は全て作品『マッド王』の邦訳である。すると、マッド王の物語をわが国で読む試みは、1992年から始まっていたのである。しかしながら、続編とされる『孤島の王様マチウシ』は未だ英訳や邦訳による出版はなされていない。現時点で続編を読む手立ては、ポーランド語版、ロシア語版、ドイツ語版、フランス語版にあたることでしかかなわない。本論では、フランス語版『Le roi Mathias sur une Ile Désert』¹⁴⁾からの翻訳を試みた。中欧でのコルチャック研究においてこの続編への関心は非常に高く、ドイツのコルチャック研究者、ヴァウトラウト・ケルベル・ガンセは来日した際にその価値を、1929年にコルチャックが思想の核心に至るための重要な作品と評している¹⁵⁾。また、ガンセによると『マッド王』の物語こそが、子どもの権利の尊重というコルチャックの思想の形成過程を表しているという。しかしながら『マッド王』での子どもの扱いは、どこか道具主義的なものであり、後に語られるコルチャックの子どもが尊重される権利という核になる思想とは似て非なるものであるとの指摘もなされている。ゆえに、『孤島のマチウシ』を読み解く意義を見出すには、前編である『マッド王』との比較が不可欠であると考えられる。そこで次章では、『マッド王』と『孤島の王様マチウシ』の差異を検証し、そ

の特異性を明らかにしたい。

Ⅲ. 『孤島の王様マチウシ』の特異性

1. 『マット王』の物語の性格

マット王（ポーランド語では“マチウシ”，フランス語版では“マティアス”と呼ばれている。以下、コルチャックの母国ポーランド語版の呼び名である“マチウシ”と表現する）の物語は、二巻から成り、いずれも子ども向けに書かれた物語であるものの、主人公は魔法を使うわけでも、いわゆるヒーローものの様相を呈しているわけでもない。物語の中の王様マチウシの幼少期が『マット王』に、少年に成長したマチウシそして大人になることなしに命を落とす最期までが『孤島の王様マチウシ』に描かれている。第二巻は、社会の改革に失敗したマチウシが死刑の宣告を受ける、という場面から物語が始まる。このような作品は子ども向けにしてはいささか異例といえよう。『孤島の王様マチウシ』は『マット王』の続編であると述べたが、一巻と二巻の性格は興味深い異なりを見せる。『孤島の王様マチウシ』のもつ特異性は後に述べることとし、ここでは『マット王』の性格について述べる。

J. リフトン¹⁵⁾が、マチウシの物語をコルチャックの「エミール」と評し、『子どものための美しい国』という邦題がつけられている様を見る限り、物語の内容は子どもにとって楽しいものという印象を与える。しかし実際には、子どもの権利を主張する子どもたちと、その勢いに恐れを感じた大人とのせめぎあい描かれ、世の中が混乱する様子が読み手に伝えられる。冒頭にまえがきとして、次のように記されている。

この写真をとったころ、（コルチャックの子ども時代の写真が掲載されている）わたしは戦争に行き手がらをたてたり、人食い人種の国に行ったり、つまり、この本の中でマットがやったようなことを残らずやってみたくて考えていました。けれども、大きくなるにつれてそんなことはすっかり

わすれてしまい、思い出したときには、戦争に行き戦ったり、旅行をしたりするひまも、元気も、なくなっていたのです。マットの年ごろの自分の写真をここにのせるのは、マットについて書いた著者のわたしではなく、王さまになりたいと本気で考えていたころのわたしがどんな様子をしていたか、読者のみなさんにぜひとも知ってもらいたいと思ったからです。王さまや、旅行家や、作家の、大人になるまえの、あるいは年をとるまえの写真を見てもらう必要があるのは、読者がとんでもない思いちがいをするといけないからです。読者は、そういう人たちははじめから何もかも知っていて、子どもだったことなどなかったと考えてしまうかもしれません。子どもがひょっとして、自分のような者はえらい政治家や旅行家や作家になれるわけがないと考えるとしたら、それはたいへんなまちがいです。

さて、大人はわたしのこの物語を読まないほうがいいのではないかという気もしています。ある場面は大人にとってひどく不愉快でしょうから。それに大人は、この本のなかに書いてあることを誤解したり、ばかにしたりするかもしれません。でも、もしも大人が私の本を読んでみようという気を起こしたら、それはそれでわるいことではないでしょう。それにけっきょくのところ、大人にこうしてはいけない、ああしてはいけないと命令することなど、できるものではありませんからね。いけないといっても、やりたければやるでしょうし、だいたい、大人に無理にいうことを聞かせるなんて、それこそ無理な相談なのですから。

ヤヌシュ・コルチャック

※文中の波線と（）内は筆者加筆

これを言う背景には、読み手である子どもたちに、なりたい自分になることは実現可能であり、誰でも偉大なことを成し遂げられるというメッセージを届けたいというコルチャックの強い思いがあると同時に、大人に対する挑発

ともいえる問いが秘められている。つまり、読み手が大人である場合、子どもは可能性に満ちた存在であるということをおあなたは理解しているか、と問うているのである。波線部について、あえてこのような表現をしているということは、この物語を大人は読まないようにとストレートに受け止めるのではなく、実は大人にこそ読んでほしいという隠れたメッセージが込められていると解釈すべきであろう。

コルチャックは、小田倉が「コルチャックにとって子どもは、真剣で真面目な日々を送っており、大人の認識よりはるかに物事を深く理解し、捉え、真剣に受け止めている」¹⁶⁾と指摘するように、大人が子どもを既に完全な人間としてみているかどうか強く迫っていることが理解できる。そして、まえがきに書かれた「子どもはけっして小さくない、ということが、よくわかるでしょう。みなさんは、自分は大臣や探検家や作家にはなれない、と思うことがあるかもしれませんが、それはまちがいです」という彼の言葉も、子どもへ向けたメッセージと読むと同時に、大人への問いであり、子どもの価値を大人のそれと比較して過小に評価する者へ再考を求めていると読むことができる。

ワロン¹⁷⁾が、子ども研究の理論的特徴について、子どもの発達を、一方通行で量的なものにとらえる見方を否定し、困難や危機、後退といった複雑なものとしてとらえようとしているが、コルチャックは物語るというナラティブなアプローチでわれわれ大人に問いかけ、考えさせたのである。さて、この童話の中で注目すべきもう一つの視点は、子どもを尊重（ここでいう尊重とは、コルチャックが後に述べるそれとは必ずしも一致しないかもしれない）した結果、社会が破綻するという結末が意味するところである。ここでコルチャックは、何を語りたかったのであろうか。一見幼き王の冒険物語とみえるこの物語に、コルチャックはどのような思いを込めたのであろうか。

『マット王』に描かれた混乱を通してコルチャックが描きたかったもの。それは現実としての子どもの人生ではないだろうか。理論として子どもを理解するだけではいけないという現

実を、自身の体験で目の当たりにしていた彼が、子どもの現実に向って向き合っていくとした。つまりそれまでの思索というものへの転換がおきたと考えることができるだろう。物語の主人公であるマチウシは、王さまでありながら王宮を脱走して戦地に出向き参戦する。また、子どもたちのために動物園を作ろうと、危険な人食い人種のいるアフリカに渡り、大人たちが恐れおののく黒人の王バン・ドラムと友達になる。さらに、子どもたちだけで議会を組織し、大人からは見向きもされないような提案を挙げていく。

読み手の子どもたちは、こういったマチウシの姿に対して、現実味がありながらもできそうでできないことをやってくれる頼もしい存在と受けとめるだろう。言い換えれば、子どもたちの現実には、やってみたいができないということがあまりにも多いということである。だからこそ、マチウシは、自分の代わりに行動し失敗してくれる貴重な存在といえるのである。一方、大人が読む場合においては、子どもと大人の関係性の問い直しへの手がかりと見ることができる。

石川道夫は、『子どものための美しい国』について「20世紀の教育史の歩みと合わせて考えても、いくつかの点で注目に値する作品」¹⁸⁾と評している。石川にいわせれば特に物語の構成に注目すべき点があるという。一般的に教育小説は教養や人間形成を目指しての上昇的な筋立てを好むのが常であるが、マチウシの物語はこのような見方から考えれば教育小説ではないものの、内容は確かに教育が主題になっているのである。また、エミールを上り道の教育小説としたならば、マチウシの物語は下り道のそれであるとの見解も示している。このように、マチウシの物語は邦題である『子どものための美しい国』とは対照的な、人間としての子どものありのままの姿と、そこにどう向かえばよいか戸惑う大人との葛藤の物語という性格をもちあわせているということが見えてくる。そして、わが国では前編のみが翻訳され世に出されたが、子どもと大人の関係性の複雑さを理解した上で、どのように子どもを理解すべきか、

その理論と実際がちりばめられているのは実は後編『孤島の王様マチウシ』であることもまた見えてきたところである。

2. 『孤島の王様マチウシ』に見る子ども理解のプロセス

『孤島の王様マチウシ』の物語は、マチウシが率いる軍を敗戦に追いやった隣国の王様たちが、子どもであるマチウシをどのような刑で罰するか相談するところから始まる。冒頭には、様々な王たちが如何にマチウシをみているかということが描かれており、大人がもつ多様な子ども観を見ることができる。また、彼を取り巻く大人の子どもの観と共にマチウシの内面の成長が描かれていることも特徴の一つである。

マチウシが捕まってから七日以内に孤島に流されることになっていましたが、もう三週間が過ぎていました。それは、マチウシを捕えた三人の王様の意見がなかなか合わなかったためです。

若い王は、マチウシが大嫌いで、いなくなっただけでほしいと思っていました。

悲しそうな顔の王は、今でもマチウシは友達だと思っています。

東洋の王たちと親しい王は、それまで一言も口をききませんでした。この三人目の王の意見によって話が決まりました。それは、今後マチウシが抵抗できないように遠い島に流せば、平和に解決できる、というものでした。

「若い王」は、「第一巻」においてもマチウシの存在を疎ましく思い「子どものくせに」という見方をしている。「第二巻」でもまた、「若い王」は子どもながらに王位に就き、社会の改革を試みたマチウシをなまいきだと言い嫌悪感を露わにする。この一連の表現の背景には、子どもを好き勝手にさせておいたら何をしでかすかわからないという、一種の恐れのようなものが存在するという見方もできる。現に物語の中で王たちは、子どもに任せていたら何をしでかすかわからないと語っている。登場人物「悲しそうな

顔の王」は、子どもの側に立つ存在である。「第一巻」にも描かれているが、この王はマチウシが子どもだからといって難しい話を避けようとも簡単に言い換えて接するということもせず、一人の人間として子どもに向き合う姿勢が見られる。このようなかわりには、子どもであるマチウシからの信頼は得られるものの、周囲の大人からは歓迎されないという状況も描かれている。次の登場人物「東洋の王たちと親しい王」は、マチウシを遠い島に流すことを提案しているという点から冷酷に映るかもしれないが、実は現実社会の大人に最もありがちな子ども観ということができるのではないだろうか。それは、平和的に解決するために、子どもと真正面から向き合わず、大人が良いと思う解決策をあてがって事を済ませようという視点が、子どものため、と言いながら子ども不在の議論を繰り返す大人の姿と重なるからである。

このように、物語の冒頭、コルチャックは大人による子どもの理解の仕方の違いを示すような表現をして、この先の子どもの理解の変容を効果的に描いて見せようとしている。もう一人、特徴的な子どもの見方をする人物が登場する。カンパネラという王妃である。

王妃は続けて、「マチウシが小鳥に水やパンや砂糖をあげている姿を見ていると、子どもの心の純粹さを感じました。子どもは、経験していることが少ないのですから、そんなに深く考えないのですよ。」と話しました。周りで聞いていた王様たちは、退屈そうにあくびをしたり、タバコに火をつけています。中には、居眠りしたり、頭痛薬を取り出して飲み始める王様までいました。そこで、カンパネラ王妃は最後に本当に伝えたかったことを言いました。「私がマチウシを世話します！」

カンパネラ王妃は、子どもを純粹で、物事をあまり深く考えない者にとらえている。そして、「私がマチウシを世話します！」という言葉からも分かるように、子どもは弱い存在であるから大人が守らなければならない、という考えを

もっている。それゆえ、この後も、マチウシのためを思って世話をしようとするが、マチウシは王妃のかける言葉や施しに自尊心を深く傷つけられることになる。一見すると王妃は子どもを思いやっているように見えるが、マチウシ(子ども)にとってその思いやりが見当違いなものであることが、物語の随所に表現されている。例えばカンパネラ王妃は、マチウシに母がいないこと、監獄へ投獄され不自由な生活を余儀なくされていることを不憫に思い、自分が彼の母親になると申し出る。この場面から、カンパネラ王妃が周囲のどの大人たちよりもマチウシの事を思いやっているようにも見えるが、マチウシはその対応に激高し、「あなたの息子になったら、ずっと捕えられたようになります。自由ではなくなります。」と反論する。この一連のやりとりは、エレン・ケイ¹⁹⁾が子どもを保護の対象とし、子どもの権利の思想を形づくった潮流を彷彿とさせる。大人の側からみると、子どもを守り保護することが最善の利益につながると安易に結び付けがちであるが、マチウシは真っ向から、それは違うと反論する。いや、マチウシの言葉を借りて、コルチャック自身が反論しているのである。

このように、『孤島の王様マチウシ』の中には、大人が考える子どもの悲しみや喜びと、実際の子どもの悲しみや喜びの狭間で“ずれ”が随所に描かれている。ここに、コルチャックが子どもの中に人間をどのように見ていったか、ひいては子どもをどのように理解しようとしたかを考える重要な手がかりがあるのではないだろうか。それは、子どもの中の悲しみや喜びがどのようなものであるか真に理解できない限り、大人が子どもを理解することはできないと言い換えることができる。そこで次に、コルチャックが物語の中で、子どもの悲しみや喜びをどのように見ていたかについて検証していくことにする。

コルチャックは、子どもの悲しみや涙について、大人と何ら変わらないとても深刻なものとして見ている。それはコルチャックが、大人と子どもの涙の重みについて語っていることから理解できよう。老人の涙、大人の涙、子ども

の涙、「すべて涙は塩っぱいものです。」²⁰⁾とコルチャックは言う。そして、涙の重みは大人も子どももなく、全て等しいと分かる者だけが子どもたちを教育できるのであって、理解できない者は子どもを教えることはできないとさえ言い切る。われわれ大人は時に、子どもの涙より大人の涙の方が深刻さが重いと感ずるものである。大人の涙の方が、より重大で関心を寄せるに値するものであると。しかしコルチャックは、大人も子どもも涙の重みは等しいと断言する。『孤島の王様マチウシ』の中にも、そういった子どもの悲しみの深さや、そこにある子どもの思いの深さを示す場面が描かれている。次に挙げるのは、マチウシが飼っていたカナリアが死んだ時の様子が描かれている場面である。

マチウシのカナリアが死にました。カナリアは、とても歳をとって、死因は老衰でした。最近、歌もうたいませんでしたし、鳥かごから出ようとしませんでしたし、水場で遊ぶこともなくなりましたし、食欲もありませんでした。マチウシは、そのうち元気になるだろう、と思って見ていました。亡くなる前日、カナリアはとても悲しそうな顔をしていました。苦しそうに、口をパクパクさせます。マチウシは、くちばしに息を吹き込んでみました。病気になるのかと、とても不安でした。カナリアは、とても苦しかったのでしょうか。

朝、カナリアの体は冷たく、硬くなっていました。頭が少し動いて、片方の目が開いていました。マチウシは、もう一度、くちばしから息を吹き込んでみました。そして、どうしたらいいか相談するために、ヴァレンティンのもとに走りました。急いで走りましたが、ふと、(やっぱり、カナリアは、もう死んでしまうんだ。ぼくは、また一人ぼっちだ。)と、家に帰ってカナリアを埋めることにしました。

まず、金色の紙で、カナリア用の王冠を作りました。この鳥は、王様の鳥ですから、王冠が必要です。それから、小さな箱を探

しました。箱の中には緑色の紙を貼り、綿を敷きつめ、さらに葉っぱを敷きました。その棺に、カナリアを入れました。誰にも分からないように、静かに作業しました。とても時間がかかりましたが、マチウシは1人で進めました。カナリアは、亡くなった母親からもらった鳥でした。父親ももうこの世にはいません。ですから、マチウシにとってカナリアは、特別な存在だったのです。お守りのような、とても大切なものでした。

マチウシは、カナリアを入れた棺を、小さな丘の上へ運びました。その丘に、孤島での唯一の友達の墓をつくることにしました。誰からも見えないくらい高い所まで登ると、棺を地面に降ろしました。カナリアの棺はとても小さくて軽いものでしたが、マチウシにとっては、とても重く感じました。

マチウシはナイフを取り出し、穴を掘ると、棺をそっと埋めました。昔の人は、亡くなった人を埋める時、剣で土を掘りました。それと同じように、大切なカナリアのために、マチウシはナイフで土を掘ったのです。(もう一度、カナリアと話がしたいな。もしかしたら、奇跡がおきるかな?) そう、奇跡がおきたのです。でも、マチウシが望むような奇跡ではありませんでした。マチウシがカナリアを穴の中に置いた時、力強い鳥の鳴き声が聞こえたのです。今までに聞いたことのないような、長い長い鳴き声でした。その鳥は、カナリアの友達でしょうか? それとも、仲の悪かったカナリアが謝りに来たのでしょうか。それとも、亡くなったカナリアの魂が乗り移って、鳴いたのでしょうか?

マチウシは、カナリアを埋めると、土の上に小石をのせました。十字架を作ろうか迷いましたが、また今度つくことにしました。急に、亡くなったお父さんとお母さんのことを思い出しました。両親の葬儀のお祈りを、もっと真剣にすれば良かったな、と思いました。葬儀は、国を挙げての立派

なものでした。立派な教会に、大臣や他の国の王様たちが集って、執り行われました。今、マチウシが行っている葬儀は、海の見える丘のヤシの木の根元でひっそりと進められています。両親の葬儀に比べたらちっぽけなものかもしれませんが、こちらの方が気持ちが落ち着くと思いました。マチウシは、カナリアの墓の隣に3つの墓をつくりました。両親と、もう1つはカンパネラ王妃の墓です。丘の上には、4つの墓ができました。

ここに登場するカナリアは、マチウシにとっては心の支えとなる大切な存在であった。一見すると、多くの子どもが通過儀礼のように体験する、単なる動物の死との直面と受け止めることができる。しかし語り手コルチャックは、見過ごされそうな悲しみを、最愛のものを失った最大の悲しみと表現しているのである。どうしてたった一羽のカナリアの死に直面した子どもの悲しみを、こんなにも深いものとして見ることができたのか。それは、書き手であるコルチャックが「マチウシにとってカナリアは、特別な存在」であり、「お守りのような、とても大切なもの」という理解ができていたからである。『孤島の王様マチウシ』に描かれる子どもの悲しみは、一見すると小さなことと見られがちであるが、そこに込められた子どもの思いは大人と何ら変わらないものであることを、コルチャックは私たちに強く示しているのである。また、マチウシがカナリアのために作った質素な墓と、要人が亡くなったさいに国を挙げて豪華な葬儀がなされたことを対比させ、見た目の大小にかかわらず、悲しみの価値は等しいということ、彼は「すべて涙は塩っぱいもの」と見ることができるかということ同様、私たちに問いかけているのである。

ここまで、コルチャックが子どもの中に人間を見る、すなわち子どもを理解する過程で、悲しみや考えの深さは大人と等しい価値をもつという考えを形成する軌跡を追ってきたが、一方で物語の中には、子どもの、ずるさやいたずら、底意地の悪さも表現され、子どもが時に、大人

にとって邪魔な存在となることも描かれている。例えば、物語に出てくる孤児院の子どもたちと、孤児院に入所して間もない子どもたちとのやりとりの場面で、もともと施設に入っていた子どもたちが、新参者の子どもたちに意地悪をし、ずる賢く言い寄る姿がそれである。この子ども達からは、純真無垢の対極にあるとでもいふべき姿が迫ってくる。その姿は、次のように語られる。

施設にいた子ども達は、補導されて連れてこられた子ども達に、意地悪を言い始めました。施設の子どもの目が面白がって言いました。

「このポケットナイフは、お前には必要ないよ。俺が使うよ。もらっておくよ。」

「この手鏡、もらっていい？あなたの家には、もっといい物があるでしょう。」

「その素敵なペンを貸してくれたら、面白いことを教えるよ。」

「私の髪の毛を見て！もうボサボサでしょ。だから、あなたのそのヘアピンをくれないかしら？ヘアピンは、私の方が必要よ。」

このように、補導された子どもの持っている物を取ろうとしました。ただ、施設の子どもの全員が意地悪を言うわけではありませんでした。このようなやり取りを見ているだけで面白がっている子どももいました。新しい子どもをからかうことは、とても面白かったのです。普段は、園庭で走ったり、2人組になって散歩をしましたが、ちょっと面白くありませんでした。散歩は、手をつないで歩いていたので自由になれず、店のショーウィンドウを見ることもできませんでした。あまり楽しくない毎日でしたので、新しく来た子どもをからかうことが面白く思えました。

次の場面でマチウシは、自分より幼い子どもとのかかわりの中で、その扱いの難しさを感じる。かつて、大人が子どもに対してひどい扱いをすることに反感を抱いていたにもかかわらず、今は共感さえできるという、立場の逆転が

おこっていく。

以前、パテシ王が子どもに対して、ひどいことを言ったのはなぜか、今のマチウシには分かるような気がしました。多くの大人が、子どもに対してひどい扱いをしていることが分かるような気がしました。確かに、子どもたちは、大人の邪魔をすることがあります。小さい子どもが、お兄さん、お姉さんの邪魔をすることと同じように、大人は大人で、子どもは何も分からない、と思っているのです。

たぶん、アラは、カナリアのように、何かを分かっていたのでしょう。カナリアと同じではないでしょうけど。マチウシは、自分が小さかった時に何を考えていたか、よく覚えていません。

アラは、いつも走ったり、泣いたり、「何かちょうだい…」と言っているわけではありませんでした。静かになる時もありました。彼女は、じっと遠くを見つめたり、マチウシの顔を覗き込んで、目の中をじっと見ては深いため息をつくことがありました。また、ある時は、恐ろしそうな顔をして、マチウシからもらったお菓子が「なくなっちゃった！」と言って、そのすぐ後には跳んで笑い転げるということがありました。

子どもを人間として尊重することと、子どもを邪魔な存在と見ることは相対する見方である。困った存在としての子どもは、コルチャックが孤児院で子どもと過ごす中でも目の当たりにはしていたことである。それは、次のようなコルチャックの言葉からもうかがい知ることができる。「子ども一百面相の大役者。母親、父親、祖母、祖父に見せる顔、厳格な教師、寛大な教師、料理人、女中、友だち、金持ちと貧乏人に見せる顔。その一つひとつがまったく違っている。無邪気でいてずるく、謙虚で尊大、優しいかと思えば恨みっぽく、行儀がよいくせにいじっぱり。あんまり上手に化けるので、振りまわされるのは大人の側だ。」²¹⁾ このことから物語の子どもたちの意地悪やずるがしこさ

は、コルチャックが実際に目にしてその解釈に戸惑った経験をもとに描かれたと推察される。こういった子どもの、ずるさやいたずら、意地悪をコルチャックは物語の中でマチウシに、「子どもたちは、原始人のようだ」と語らせている。子どもを従順で素直な存在という見方で見る場合、子どもは大人によって保護され救済される存在と捉えられがちである。しかし、マチウシがいう「原始人」という見方は、従来の保護され救済されるという子ども理解の枠組みを乗り越え、むしろそれを否定することによって新しい子ども理解への道程を示すことにつながっているようにも見える。喧嘩やいたずら、ずる賢さをもつ「原始人」として子どもを見ていくと、子どもはときには大人が定める規範や枠組みの中におさまりきれない存在であることが再確認できる。このように考えるコルチャックの子ども理解のプロセスは、子どもの純粋性や無垢を強調するロマン主義的な子どもの見方とは、一線を画すものともいえよう。

IV. 子どもと大人の「対等な関係」の形成と子ども理解

『孤島の王様マチウシ』の終盤、自由の身となったマチウシは王の身分を捨て、工場で働くことを選択する。そこには、マチウシの願いと大人の考えの間で生じたずれが特徴的に描かれている。

工場の人たちは、マチウシに軽いものを運ぶ仕事をさせようと思いました。しかし、マチウシは、「できないことがあったら言いますから、皆さんと同じ仕事をさせてください。特別扱いは、しないでください。」と願い出ました。周りの人たちは、マチウシに何かあったら大変だと思っていました。

しかし、工場の大人は、マチウシと共に働く中で、マチウシの本当の願いやその存在の尊さに気づくことになる。コルチャックは、大人の眼に映ったマチウシを次のように描いている。

マチウシは、とても良く働きましたし、なくてはならない存在になっていました。みんな、マチウシが大好きになりました。王様のままでいられたのに、工場の人たちと分け隔てなく働いている姿に親しみを感じていました。

町の人や、工場で働いている人たちは、ずっとこのままマチウシにいてほしいと思っていました。

周囲から、同じ人間として対等に見られるようになったマチウシは、次第に大人から信頼される存在となる。そして遂には、子どもと大人の関係性に変化がもたらされるのである。大人が子どもの本当の願いに気づき、応答的で共感的な関係性をもつとき、世の中が少しずつ変化していく。ここで注目したいのは、世の中を良くするために子どもを理解するのではなく、子どもを理解し、子どもが尊重される存在になったときにはじめて、社会がより良い方へ変わるのだというコルチャックの示唆である。マチウシの物語を通して、コルチャックが最も言いたかったのはこの点にあるのではないだろうか。

かつて、この町には、酔っぱらいや、泥棒や、悪さをする子どももいました。それで、いつも警察が出動していました。

マチウシが来てからというもの、事件やケンカが無くなったのです。町の人たちは、マチウシに見せようと窓辺やベランダに花を飾りました。道路の掃除にも力が入り、男の子たちは石を投げることをやめました。

大人と子どもの関係性が語られるとき、子どもが今、ここを生きていることを尊重すべきだとよく言われる。しかしながら現実の中で大人はとかく、子どもを急がせる。結果、急がされる子どもたちが増えていくわけである。ディヴィッド・エルカインドは著書『急がされる子どもたち』²²⁾のなかで、一度きりの子ども時代を奪わないために大人たちができることとして「生きるための技術とは子どもが学ぶべきもっ

とも難しい勉強であり、親や養育者にこうした大きな人生観があれば、子どももきちんとそれを身につけていく」と述べている。この著は、洋の東西を問わず現代において子どもが幼いうちから追い立てられストレスにさらされていることに警鐘を鳴らす一冊として2006年に発表された。エルカインドとコルチャック両者が生きた時代を比較して見ていくと、コルチャックが生きた時代から連綿と考えつづけられている子ども理解や応答的で共感的な子どもと大人の関係性はいまだ途上にあるということが鮮明に見えてくる。子ども理解こそ、再考すべき喫緊の課題だということを認識しない風潮が今後も続くならば、目に見える成果なら何でも成長ととらえかねない保育実践においては、大人の都合を優先した関係性に依拠する可能性ははるかに高くなる。そのとき保育には何が起こるのだろうか。

V. おわりに

コルチャックの思想の発展の軌跡である『孤島の王様マチウシ』には、子どもを理解することの複雑さが克明に描かれている。先に見てきたように、物語に込められた葛藤や困難というものを、保育者が自分のものとして考えていくことは、自身の子どもの理解の在り方を問い直し、保育理論を再構築するうえで有効であるということがいえるだろう。また、『孤島の王様マチウシ』におけるコルチャックの子どもの理解の変遷から、子どもが理解される、すなわち子どもが尊重されるとき、大人も子どもも対等で応答的な社会へと変わる可能性があるというプロセスが見えてきた。これは、社会を変えるために子どもを理解するのではなく、真の意味で子どもを理解していく先に見えるのは、社会の変容であるというコルチャックの思想発展の片鱗ともいえるだろう。子どもが意見を形成するだけでも、大人が子どものために思って何かをしようとするだけでも子どもを理解することはできないということである。

では、保育実践に当てはめて考えてみるとどうであろうか。保育を理想の形に向かわせるた

めに子ども理解が必要なのではなく、子ども理解のたゆまぬ問い直しによって保育実践がより豊かなものへと昇華していくということだろう。子どもの純粹無垢な姿が、大人の子どもの期待と結び合うとき、子どもの純粹性に基づく従順で善良な子ども像が保育目標として設定され、それを美化する価値観が形成される。そうした子ども像を目指した保育が、保育者たちの課題とされ、保育者自らもその理想的子ども像に見合う保育者像を背負うという連鎖がうまれる。その結果、多様な子ども理解と多元的な子ども観の生成は困難なものとなり、保育者もそして子どもたちも疲弊していく。これに対し、コルチャックの『孤島の王様マチウシ』の中で述べられていた「原始人」として等身大の子どもをみていくという子ども理解のプロセスは、既成の枠組みや規範を打破し、多様な子どもの特性の発見とともに新たな子ども理解への視座を有するものである。子どもの中に存在する等身大の部分は、時に喧嘩やずるさ、意地悪、いたずら、悲しみとして出てくることがあるが、このようなありのままの子どもを見るということは、子ども理解の深まりにつながり、ひいては豊かで質の高い保育実践がもたらされることであろう。コントロール不能にも思われる子どもの生命の力強さに触れたコルチャックが子どもと共に生きようとするのは、従来の子どもの理解の枠組みの中においては成り立ち得ず、必然的に根本から子ども観の転換を迫られるものであった。

ところで、バーバラ・ロゴフは人間が育つ多様な文化コミュニティへの理解の深まりについて、「他を考慮するために、自分の前提を一時的に棚上げにする必要」²³⁾があるとし、他者の数々のパターンを推測し、吟味し、自身の概念を刷新し続ける努力が必要だと分析している。つまり、理解するという観点でいえば、そこに行きつくまでの得策は存在せず、絶えず学び続ける姿勢が不可欠だということである。この視点は、正解がなく、学び考え続けることが求められる保育者の専門性につながるものである。保育実践において子どもを理解する力は、いわば専門家としての最低必要条件のように扱

われる。しかし、ここまで見てきたように子どもを真の意味で理解することはとても難しいことである。だからこそ、コルチャックが葛藤の中で書ききった『孤島の王様マチウシ』の物語の世界から、ナラティブなアプローチによって子どもを理解する手がかりを得ることは、子ども理解のあり方を問い直し、刷新するために有効であると考えられる。そういった意味で、この物語が保育実践における子ども理解の深まりを助長する可能性の一端でも示すことができたと期待したい。

注および文献

- 1) 田中孝彦(2009)『子ども理解 臨床教育学の試み』岩波書店
- 2) クロード・レヴィ＝ストロース (Claude Lévi-Strauss 1908-2009) 1908年ベルギーに生まれる。文化人類学者。ブラジルのアマゾン先住民の研究などを通して、西洋文明に対して批判的立場に立つ。
- 3) Claude Lévi-Strauss (1962). *La pensée sauvage*, Librairie Plon (大橋保夫訳(1976)『野生の思考』みすず書房)
レヴィ＝ストロースの代表作の一つ。すべての文化にはブリコラージュにたとえられる「野生の思考」が働いており、文化は優劣で比べるものではなくそれぞれが対等であると した。20世紀の思想史における大きな転換点となった。
- 4) Claude Lévi-Strauss (1962). *La pensée sauvage*, Librairie Plon (大橋保夫訳(1976)『野生の思考』みすず書房)
- 5) 柴田千賀子 (2015)『ナラティブ・アプローチによる「子ども観」転換の試み』桜の聖母短期大学紀要第39号 pp. 175-193
- 6) 塚本智宏 (2008)「コルチャック先生と子どもの権利」『子どものしあわせ No. 103』草土文化
- 7) 塚本智宏 (2009)「コルチャック先生と子どもの権利⑤」『子どものしあわせ No. 698』草土文化
コルチャック (1927)『感性』の塚本訳によるものである。
- 8) 塚本智宏 (2009)「コルチャック先生と子どもの権利②」『子どものしあわせ No. 695』草土文化
- 9) 塚本智宏 (2009)「コルチャック先生と子どもの権利⑥」『子どものしあわせ No. 699』草土文化
- 10) “マット”は男児名称マチウシ (ポーランド語) の英訳である。コルチャック研究において、多様な邦題で表現される第一巻を総称して『マット王』と呼ぶことがある。
- 11) Janusz Korczak (1923). *Król Maciuś Pierwszy*, Erstausgabe, (大井数雄訳(2000)『マチウシ一世王』影書房)
- 12) Janusz Korczak (1923). *Król Maciuś Pierwszy*, Erstausgabe, (中村妙子訳(1988)『子どものための美しい国』晶文社)
- 13) Janusz Korczak (1923). *Król Maciuś Pierwszy*, Erstausgabe, (近藤康子訳(1992)『王さまマチウシ1世』女子パウロ会)
- 14) Maurice Wajdenfeld (1986) Traduit du polonaise par Maurice Wajdenfeld Le roi Mathias sur une Ile Désert, À ÉVREUX
上記フランス語版全290ページを筆者が翻訳した。
- 15) 2010「最近のコルチャック研究から考えること」『コルチャック先生と子どもの権利条約』日本子どもを守る会主催講演会
- 16) Betty Jean Lifton (1988). *The King of Children: The Life and Death of Janusz Korczak*, Chatto & Windus, (武田尚子訳(1991)『子どもたちの王様 コルチャック物語』サイマル出版会)
- 17) 小田倉泉 (2002)「ヤヌシュ・コルチャックの子ども観に関する考察」『日本保育学会大会発表論文集(55)』日本保育学会
- 18) Henri Wallon (1949)『Les Origins du Caractère Chez L'enfant』Universitaires de France
- 19) 石川道夫 (1994)「子どもたちと生きるために—ヤヌシュ・コルチャックの教育論—」『人間の教育第7号』日本ベスタロッター・フレール学会
- 20) Ellen Karolina Sofia Key (1900). *Barnets århundrade (1900) som översatts* (小野寺信・小野寺百合子訳(1979)『児童の世紀』富山房百科文庫)
- 21) Andreas Flitner, Hans Scheuerl (1985) R. Piper & Co. Verlag (石川道夫訳(1994)『教育学的に見ること考えることへの入門』玉川大学出版部)
- 22) Betty Jean Lifton (1988). *The King of Children: The Life and Death of Janusz Korczak*, Chatto & Windus, (武田尚子訳(1991)『子どもたちの王様 コルチャック物語』サイマル出版会) の

- 中で, J. コルチャック著『子どもを愛するには』からの引用がなされている.
- 23) David Elkind(1981). THE HURRIED CHILD Growing Up Too Fast Too Soon, A Subsidiary of Perseus Books L. L. C (戸根由紀恵訳(2002)『急がされる子どもたち』紀伊國屋書店)
- 24) Barbara Rogoff (2003). The Cultural Nature

Of Human Development, Oxford University Press, Inc, (當真千賀子訳(2006)『文化的営みとしての発達 個人, 世代, コミュニティ』新曜社)

(2016年11月30日受付)
(2017年2月1日受理)

